

寄り添う

外国由来の子どもたちと共に

数年前、ある小学校から「おしゃべりにはできるのですが、勉強に全くついてこれない子どもがいるんです」と相談がありました。早速学校に出向き、中学年のU君に会いまし

た。人懐っこくて笑顔がかわいい彼の口から出てくるのは、所々に語彙や文法的な誤りが見られるたどたどしい日本語でした。文字は「ちゅうしや(注射)」を「ちゅうさや」などとあり得ない表記で書きました。

U君は日本生まれ、日本育ち。家庭では、外国出身の母親が話す日本

語だけで育ちました。本来なら、子どもが幼いうちは、親の母語をたっぷり聞かせて言葉の力を育むのが理

U君から教えられたこと(上)

想なのですが、彼の母親は「ここは日本だから、日本語で育てなければ」と思い、「拙い日本語」だけで子育てをしていました。日本で生きていくために、彼女なりに必死で子育てをしていたに違いありません。

ところがその結果、彼は母親の国の言葉は全く知らないまま、わかるのは拙い日本語だけ、つまり、人が物事を深く思考するとき用いる「母語」がない状態で小学校中学年になつてしまいました。

「母語がない」とはどういうこと

か、U君の支援で日々それを実感していききました。物にはすべて名前(言葉)があります。目に見えない気持ちや様子にも言葉がありま

す。言葉は物事概念形成と深く結びついているのです。その部分が育

を見て過去から未来への時間の流れを追ったりするなど、一見日本語指導からかけ離れているような指導も必要としました。

(松本市子ども日本語教育センター コーディネーター・栗林恭子)